

ビデオコム

VIDEO COMMUNICATION MAGAZINE
video com

11+12月号 隔月刊

こ ん な 楽 し み 方 も あ る ！

AV 自 遊 空 間

最新AVシステムづくり大特集

- AVシステムのポイント&セクター大研究
- AVテレビ基礎知識
- AVルーム訪問
- AVテレビ・ハイファイビデオ・AVセクター総カタログ



〈特別企画〉ハイファイビデオ研究
 ハイファイビデオ最前線&テストレポート
 〈ビデオテクノロジー・レポート〉
 ハイバンドサチコン
 〈ビデオメカ研究〉注目の高級カメラを探る

NO.18 1984
●AVCC

人物・走査線

如月小春

●劇作家

「演劇」にビデオなどの映像メディアを使うことは、重層感を出すためのひとつの方法。

取材・文／神崎里美

私の芝居の中では以前からビデオや8ミリなどの映像を使ってきたんですが、プランを立てたり撮影に立ちあったりはしても自分で、カメラを持つことってなかったんです。だから初めて自分でカメラを持った時はうれしかったです。

フレームの中で連続した動きが切りとられて行く感じが、ファインダーをのぞいている時からテレビとか映画を見ているみたいで新鮮でしたね。

先日谷川俊太郎さんからビデオ雑誌『イマジ』の創刊号で「如月さん自身を紹介する5～10分のビデオのコンテを作って下さい」というお話を受けましたが、これは凝りましたね。

撮影はスタッフの方がして下さったんですが、「私は誰でしょう」というテーマでビデオ絵本みたいなものなん

です。「これは如月さんの朝ごはんなんです」って朝ごはんのカットを撮って「如月さんは名刺をいっぱい持っています」って言ったら名刺をズラッと並べた画とか……動きはあまりつけなくてスチールっぽい画をつないで最後にドーンと引きにしていって「如月さん」の家とか、「如月さん」をとりまくもろもろの感じが見えるわけです。これは楽しかったです。

今、社会の現実の中では一人の人間かとてもいろいろな集団や人間関係と重層的な関わりを持って生きている時代だと思います。生き方のパターンも想像がつかないし、またどこでいつ何が起きるかもわからない。支離滅裂なことも現実におこっているし、だから小説にしても演劇にしても明確なストーリー性を追求したり組み立てたりが

難しいんですね。

小劇場の芝居は全般的にストーリー性のないものが多い、ストーリーそのものが問題じゃないんです。

寺山修司さんは『百年の孤独』で舞台を5つ作って、重層的なことがらが各々、同時に立ちあがるといった実験をしていますし、ロバート・ウィルソンもロスの文化祭で、世界の様々な戦争をいろいろな形で見せていくといった表現方法を使っています。

ビデオを初めとする映像メディアを使うことは、この重層感を出すためのひとつの方法だと思います。

4～5年前、西荻窪の劇場で初めてスライドを取り入れた芝居をしたんですが、その中に吉祥寺から西荻窪まで歩いている景色をしゃべる場面があったんです。吉祥寺から西荻窪までの景色をとったスライドを会場いっぱいオーバーラップさせたんです。

実際に会場に来たお客さんもその経路を歩いてきたわけだから、そのイメージと現実と役者のしゃべっている演劇の中の虚構とが全部いっしょになることができるんですね。

これは台詞だけでも写真だけでもできない重層的な想像力と映像とがいっしょになることでできるんじゃないかなって……

私の芝居は、観て下さる人によって演劇って呼ばれてもパフォーマンスって呼ばれてもかまわない。「演劇」をいつも観ている人にとってはパフォーマンス



●きさらぎ・こはる／1956年東京生まれ。東京女子大学哲学科卒業。在学中より劇団綺崎を主宰。「ロミオとフリージアのある食卓」などを作・演出する。83年綺崎を離れ、劇団NOISEを結成



◀如月小春・作・演出の最近作『トロイメライ』

ンスだなんて見えるでしょうし、逆に美術や音楽でコンセプチュアルなパフォーマンスを知っている人にとっては演劇っぽって見られるんですね。私はパフォーマンスと演劇の境目あたりをしたい。

日本の場合特に演劇に関しては、このワクから出ようって人少ないでしょ。音楽は昔からフリーミュージックがあったし、美術の分野でもダダの時代からあったけれど。

パフォーマンスの時は観客を巻き込んでいっしょにやっちゃいます。「ハイ全員でブツブツいましょう」って(笑)とかね。そうすると観客も全員ブツブツ言ってそれと録音して即再生して、これとバックに自分で好きな曲を即興で作っちゃったりとか……。

前回の芝居『トロイメライ——子供の情景』は、10歳ぐらいの都会の子供を

テーマにしたものだったんですが、言葉遊びのニュアンス、スライド、ライブ音楽、照明、そしてビデオといろいろな要素を入れました。ビデオはうちの映像スタッフが撮ったんですが、都内の景色を撮るということでコンテの段階からいっしょに話を煮つめました。

新宿とか銀座とかひと目でわかるような有名な場所は避け、ただ、あっこれは東京だなと思われる景色の中で、物が人から人へ手渡されていくという画です。最初はゆっくりそしてだんだんに加速していく、ホワイトバランスを乱したり、フィルターを使ったりして色のニュアンスを出したもので、このビデオを舞台のモニターで流したんです。

純粋に金銭的な問題として、たくさんVTR使っていくのは大変なので今回は一部分にしかならなかったんですが、



B・ブラックの新作上映会

国境をテーマにビデオを撮り続けているビデオ作家、バイロン・ブラックの新作上映会が、東京・吉祥寺F&F市民ホールで催された(9月23日)。「すてきな、すてきなわたしたち展」の特別イベントでのこと。上映作品は、『マイ外人天国』など4作品。外人の眼からみた異国への視点が新鮮だ。

ビデオだけじゃなく8ミリも16ミリもスライドもイメージーションの部分に効果がありますね。

普通の舞台美術とか装置は固定していて変化がつけにくいですから。新作『MORAL』では、27インチのモニターを10~20台天井から吊るします。舞台装置は他にほとんどなし、美術と思われるものはビデオだけ……モニター自体もひとつのオブジェとして違ったカタチで見せようと、1時間50分の全体の構成の中で、ほぼ半分は映像が流れているという感じで音楽は即興演奏でライブ。楽器もいわゆる既製のものは使わずに、楽器以外のモノをたたいたり。だから上演のたびにまるで違うものになっちゃう。すごく型破りな舞台になるはずですよ。



PHOTO: MIEKO KIYOTA

◀「私の芝居は見る人によって演劇と呼んでもパフォーマンスと呼ばれてもかまわない」

ビデオソフト情報 PART-2

NHK特集ならではというソフトが2本出た。

NHK特集ならではというソフトが2本出た。

日本最後の清流といわれる四万十川にカメラを持ち込んで自然の姿をとらえた『土佐・四万十川』。

澄んだ水と緑、そしてアユ、ウナギ、ウグイ、ゴリなど伝統漁法をドキュメント・タッチで紹介している。

そしてドキュメントといえば、もう一本、『アマゾンの大逆流・ボロロッカ』

何回かTVで紹介されている、このアマゾン河口の不思議な自然現象の姿が、ついにビデオになった。

ボロロッカと呼ばれるこの現象は、これぞ大自然の謎! といえるくらい凄まじい。アマゾン川が、まるで津波のようにうねり、大逆流は木々を瞬時に呑み込んでしまうのだ。

ビデオ・ライブラリーに是非とも加えたい貴重な2篇——。

●各カラー/50分/¥12,800/大映ビデオ

